

人生最高の旅

環境マンガ家・エッセイスト
カヌーイスト

本田 亮

[インタビュアー]

鈴木 榮一、山川 肇

[文責]

鍛冶 美行

「ピッカピカの1年生」等、数々のCMを生み出した本田亮氏。広告代理店で仕事をする傍ら、サハラ砂漠から帰国後、環境マンガ家に。その後も仕事の合間を縫ってサラリーマン転覆隊率いて国内のみならず世界各地に冒険旅行をするという、現役時代には3足の草鞋を履いて活躍した本田氏に、サラリーマン転覆隊の巻き起こす数々の珍冒険道中談をはじめ、旅から発見する環境問題や人生観を話していただいた。

真っ赤なサハラ砂漠で見た 真っ白い砂浜の正体

元々、僕は、海・山・川、砂漠とかアウトドアを旅することが大好きだったわけです。1998年に、パリ・ダカールラリーを追いかけて、サハラ砂漠に行ったんです。砂漠をずっと走っているときに、サハラって真っ赤な砂漠がずっと延々続いているんですが、向こうに真っ白い砂浜が広がっていて、これは珍しいと、そこに行って写真撮ろうって言って、車で走って行ったら、白いのは実は全部貝殻の山だったんで

すよね。なんでこんなところに貝殻の山が捨ててあるんだと思った。こんなところまで誰かがトラックで持ってきて捨てたのかなあとか思っていたけれど、そんな必要はまるでないわけだし、たまたま次の村に寄ったときに、聞いてみたら、あそこは元々すごい豊かな湖があって、漁師もいたんだよみたいな話を聞いたんです。そのとき、日本にいとまったく実感として湧かなかった、「砂漠化」って言葉が、サハラを走っていて、その白い貝殻だけの砂浜を目の当たりにして、急に現実になって立ち現れたんです。何か凄い勢

いで地球が「砂漠化」していて、僕らの幸せな文明社会は下の方から砂時計みたいに、実はどんどん崩れ落ちていくのに、文明国に住んでいる人は気づいていないんじゃないかと。これはもっともって皆に知らせなきゃいけないんじゃないかと思った。何か自分にできることはないかと思ったんです。

何も言わない自然への恩返し

違う言い方をすれば、それまでは自分自身が、海・山・川で散々遊んできたので、一番自然にお世話になってきたなと思っているんですね。一番お世話になってきたけど、自然って何にも言わないから、何も言わない自然の代わりに自分が何か言ってあげようというふうに思ったんですね。自然はどんどんどんどん荒廃していても、喋らないじゃないですか。そこにダムができて喋らないし、木が全部切り取られても喋らないし、ここにごみが捨てられても喋らないけど、喋ってあげる人間が必要なんじゃないかなと。それもたくさんの人に届くように喋ってあげるには、と考えてみたら自分はCMのプランナーだった。難しい、わかりづらい、魅力があるけど伝わりにくい商品で、たった15秒という短い時間の中に凝縮して、いかに楽しく面白くインパクトが強く伝えるかっていう仕事をしているんじゃないかと。それって、環境問題でできないかなと思ったわけです。商品に対してCMがあるとしたら、環境問題に対してはマンガがある

んじゃないかと。環境問題って、重たくて近寄りがたくて難しいってところがあるじゃないですか。それをもっと軽くて楽しくて明るくて近寄ってみたいような、そういうような問題にできないかなと思ったんですよね。それで、それをやるんだったら、マンガが良いと思ったんです。興味のない人、環境問題なんか自分には遠くて関係ないと思ってるような人が、スパッと食いつくためには、やっぱ一コマ漫画かなって思ったんです。一コマ漫画だったら、ぱっと見て笑って、ぱっと理解して、なるほどと言ってもらえればいい。じゃ環境マンガを描こうと思って、すぐ翌週に銀座のギャラリーに行っ、「環境マンガの展覧会をやりたいんです」って宣言したんです。



環境マンガ 夢の高級 マイホーム

<http://ryohonda.jp/work/?category=econozaurus>

環境マンガ「エコノザウルス」誕生

最初にやった展覧会は、地球は自然宇宙の中で唯一無比のオアシスが、このままじゃ最後のオアシスになっちゃうよというテーマでした。ただ基本的にマンガって描いたことがなかったか

ら（笑）、最初は描けなかったんですよ。でも、まわりの人に聞いて、描いて失敗して、見せて失敗しているうちに、3か月くらい経って、最初の1枚が出来たんです。それから9か月後に迫っている展覧会までに40点を描き上げたんです。

そうして「最後のオアシス」展覧会を見に来た人たちが、これおもしろいって来て、他にもやる事が決まったとき、「最後のオアシス」って言葉自体が固いなど初めて思ったんです。もっと環境マンガに「つかみ」があるようなものがないかなって思って、そのときにエコノザウルスっていうのを思いついたんですね。それはなぜかっていうと、僕がずっとしている内容のテーマは、人間がこのまま消費ばかり追いかけていると、きっといつか絶滅しちゃう。人間って、自分たちは頭が良くて他の生物達とは違うと思っていて、延々と地球の上で生き残っていける、そんな自信をもっているけど、でも実は本当に一番バカなのは人間じゃないかなって。戦争はするわ、自然環境は破壊するわ、差別はするわで、そういう意味からいっても、人間はこのまま環境破壊を続けていくと、きっといつの日か絶滅しちゃって、次の生物が地球に降

り立ってきたときに、人間の何を何て呼ぶだろうと思ったときに、やっぱ経済ばかり追いかけて、経済で肥大化した恐竜って呼ばれるんじゃないかと、人間の事を恐竜で呼ばれると何だろうというところで「エコノザウルス」が出てきたんです。

エコノザウルスがエコロザウルスになるとき地球は救われる

エコノザウルスって、いってみれば、環境問題を考えるアイコンになるというかね、それをきっかけにして環境を考えてもらうだとか、エコノザウルスマークのあるところでは環境に良いことをしているだとか、そういう、大きさにいえば、環境問題のミッキーマウスみたいにできればいいなと思ったんです。みんな、エコノザウルスのことをエコザウルスっていうんですけど、エコノザウルスなんですよ。つまり、エコノミーなんだな。エコノミーザウルスが人間なんだ。それでエコノザウルスがエコロザウルスになったら、地球を救えるんです。

アドベンチャー・チーム「転覆隊」

僕は、高校3年で進路に悩んだとき、人生の目的がわからなくなったんですね。でも、ふと、人の人生って雪山に足跡を付けて歩いていくようなものだなと思った。雪の下に何かがあるか予測不可能で、クレパスがあって落っこちるかもしれない。だから、人生なんて明日死ぬかもしれない、いつまでも続く



エコノザウルス

<http://ryohonda.jp/work/?category=econozauros>

と思っちゃいけないと思ったんですね。ならば、自分の人生が楽しかったと思えるようにしたい。じゃあ、自分が集めていきたいものって何かというと、初めての体験だと思った。1度目の体験は2度目の体験では絶対に超えることはできないから、毎日初体験を積み重ねていけば1年で365個の貴重な年輪ができるはずだと思ったんですよ。見たことのない景色とか、行ったことのない場所だとか、とにかく自分にとって初めてというのがいくつあるかってことが、人生を楽しくするんじゃないかと思ったんですね。そう思って、いろんなアウトドアで遊ぶときも2度と同じことはしないようにしていて、そのためには仲間が必要なんですね。一人じゃできないことだらけだから。沢山いると皆が協力して、若干危ないこともできるというようなこともある。それで、サハラ砂漠に行ったのと同じ年に転覆隊っていうチームを作りました。そのチームはいわば僕が自分のやりたいことを実現するために作ったようなチームなんですね。だから、すべての計画は僕が立てているし、隊員達

と合議制はないんですよ。隊員達と合議制を取ると大体同じところに決まってしまう。ほとんどのチームはそれでやるんですけど、日程のことも、隊員の日程も考慮するけど基本的には僕が行きたい場所を決めて、行きたい日も決めて、皆に告知すると。そうすると来れる隊員だけが集まるんです。

ひどい旅こそ、最高の旅！

毎回出てくる転覆隊の「旅話」っていうのがいくつもあって、それがひどい旅なんですね。毎回、その旅の話が出て、毎回笑う。だから、本当にそういうひどい旅はお得だなと。何回も笑え、何回も友達と盛りあげられる。代表的なのをいえば、アマゾンの蚊地獄の話だとか、カムチャッカの噛みつきバエの話だとか、佐渡海峡横断失敗の話だとか、知床半島置き去り事件だとか、もういっぱいあるんですけど。話のオチももうわかっているんだけど、毎回そこで笑うんです。でも、それが本当に『最高の旅』なんじゃないかな。転覆隊で、ニュージーランドのすごく



転覆隊 in the office & in the nature

転覆隊：「転覆隊にいる人は精神的ストレス、ないと思うよ。ずっと我慢して仕事をしているのと大して変わらない状況で、行って帰ってくると、明らかにここ一つ素晴らしい体験っていうダイヤモンドを手に入れているからね。忙しい人ほど行かなきゃいけないんだよ、本当は。それで心のバランスがとれちゃうんだ」

<http://www.facebook.com/tenpukutai/1988>



大きな滝をポーテージ HP より
©RYO HONDA 2013

気持ちのいい川を下ったんですよ、実際、その時の思い出話は誰もしない(笑)。語りようがないんだな。語っても、みんな、「あ、そう。よかったね」で終わっちゃう。よかったけど、語りたくなる思い出がないんだよね。ところが、「すごいでしょ、蚊が!」とかいうと、みんな乗り出してくるじゃないですか。そこに居るときは、もう一刻も早く帰りたい、一刻も早く抜け出したいの一心ですよ。でも、帰ってくると、それが凄い輝きですんですよね。これは、「ひどい旅こそ、最高の旅になる」、だから、そういう旅をできるように仕向けているところはありますね。

人生史上最強のビール

僕の人生史上最強のビール・鍋っていうテーマがあるんだけどね。要するに、あの時のビールはほんっとーに美味かったよねっていうベスト10を挙げると、ベスト9くらいまでが転覆隊になっちゃうんじゃないですかね。究極ですから。佐渡海峡横断失敗して、佐渡海峡を12時間くらい彷徨って、そして結局、漁船に

救出してもらって、佐渡の赤泊^{あかどまり}に入った。で、赤泊に入ったら、佐渡の島民たちが待っていていたんですよ、「歓迎」って書いて。これ、もう超恥ずかしくて、佐渡海峡横断失敗しているのに、「横断おめでとうございます」と書かれた横断幕で出迎えられて、写真ばちばち撮られちゃって、佐渡の赤泊の市長さんが、お酒だとかわんさか進呈してくれて、いやあ、参ったよ。とにかく宿に行っ、全身、塩だらけで12時間くらい漂っていたから、喉がカラカラで、その時最初に飲んだビールが、人生史上最強だったな。驚いた、あのビールは。キリンビールだったけど、甘いんだよ。何でこんなにビールが甘いのか?っていう。1杯目、2杯目、3杯目、ビールが甘い。立て続けにビールを3杯飲んで、4杯目でやっとビールの苦い味がした。6杯目、7杯目あたりで、会社帰りに飲むビールの味になったんですよ。



海は手ごわいと語る本田氏。「五島列島では海上保安庁にお世話になった。このときは、マズイな、怒られるかもしれないと思ったんだけど、海上保安庁は、意外にも喜んでた。遭難しているカヌーイストを助けたってことで、凄い親切にもらったんだよ」

『隊長、またそのセリフですか!』

転覆隊の冒険旅行は、いつも未知数なわけ。「どうなるんですか!この

先？」って、隊員が聞いても、僕もわからない。でも未知数だから、凄いリフレッシュすると思うんだよね。その反面、失敗もよくするわけなんですよ。でも、失敗してもいいわけ。失敗したほうが面白いから。大誤算っていうのもしょっちゅうあって、「まさかな、こうなるとはな」と俺がいうと、「隊長、またそのセリフですか！」(笑)。

マウンテンバイクで山を登って降りてくるっていう企画でね、富士山にマウンテンバイクを担いで登ったりしたんだよ。そのうち吾妻山^{あがつまさん}ってとこにマウンテンバイクを担いで登った。担いで登ったら、山の上が岩だらけで、自転車に乗る場所がない。で、隊員たちが、「隊長、どこで自転車乗るんですか」ってきくわけよ。「乗れねえな、ここ」って。それで、担いで降りるしかないなってことになった。「この自転車何ですか？これ、十字架じゃないですか」って(爆笑)。ずーっと丸一日自転車担ぎっぱなし。傍から見れば、「あんたたち何やってるの？」。隊員たちから、「どうしてここを選んだんですか？」ときかれて、「いや、ここができるような気がしたんだよ」。「だ、誰かがやったとか、そういうレポートを見たんじゃないんですか？」「いや、見たわけじゃない。まさかなあ、岩だらけだとは思わなかったな」って。「隊長！また、そのセリフですか」(笑)。うん、担いで登って担いで降りる。あれは辛かったよ。

集めているのは「感動」

結局、こういう話を人にすると人は

喜びますよ。僕は、人間の欲って、食欲とか性欲とか物欲とかいろんな欲があると思うけれど、僕の一番の欲は感動欲なんだな。食欲だけじゃなくって、もの凄く美味しいモノを食べると感動するじゃない。そういうのを大事にしたいと思っている、感動コレクターなんです。僕が集めているのは感動なんです。

旅先の免税店でいろいろなものを買った物したり、ファッションや宝石ばかりにこだわっている人は、やっぱり「もの」を集めてる。感動を集めるって思ったら、別に「もの」なんかなくてもいいですよ。感動はね、どこにでも持っていけるんです。ものは持っていけるところ限られているし、いつまでも残りませんから。でも感動は一生残るんですよ。一生残るし、どこにでも持っていけると。人はやっぱり「もの」より「こと」に金をかけるほうがいい。僕は、ものに関しては凄くセコかったりするんですけど、「こと」にはね、結構ががんに投資するね、おもしろいと思ったら。日本人はそれが凄く不得意。



僕が旅をする場合は、地図を広げて、地図に勝手に線を引く。この辺りおもしろそうだなって思ったら、自分のルートで、歩くかカヌーに乗るかその道具を決める

ことに時間やお金をかけるのが凄い不得意だよ。でも、それをできる人間になったほうがいいと思うな。

「もの」より「こと」が幸せにする

身の回りの狭い世界ではなく、もっと広くて大きな人の生き方というスパンでみると、一番自分を幸せにするのは「もの」じゃなくって、「こと」だってわかりますよ。要するに目に見えないとか手に取れないことによって、人は一番幸せになれるんだよね。手にとれる家や車や貯金って、ある日突然津波にさらわれたりするんだから。だけど、手に取れないような信頼だとか、教育だとか、体験とかそういうものは残る。そういうものがあると、割りどこにいても、幸せ感も付いてくるって感じる。迷ったり行き詰まった時には狭い世界じゃなくって、自分の人生という尺度で考える。いつも、人生という大きな尺度で考えると、正しい判断をするもんですよ。だから、今月の営業目標を達成できなかったとか、プレゼンで負けたとか、彼女に振られたとか、そういうのが落ち込む材料であったとしても、自分の人生という尺度でみてみると、ここでプレゼン失敗したのってどの程度の意味よ、って思うわけですね。そうすると、米粒みたいな失敗だったなと思ったりするじゃないですか。休暇取って1週間タヒチに行くのも、70年の人生の中でみると、その1週間って、どうよと。ま、米粒みたいなもんですねえ、みたいな。だから、人生的に考えると、今俺は何

をやるべきか、どういうことを楽しむべきか、どういうことで落ち込んじゃいけないのかってことがわかったりするわけですよ。

行って自分の肌で感じる初めての体験は人と共有できる財産になる

5～6年前の内閣府の若者調査から、欲しいものベストテンに、ソファーに座って3m以内のものしか入ってこなくなかった。デジタルテレビが欲しいとか、スマホが欲しいだとか、ゲームが欲しいだとか。これは恐ろしいよね。それくらい若者たちが楽に体験を済ませている。世界中の何でも体験した気になっている。行ってもいいのにベネズエラのエンジェルフォールを見た気になれるわけ。体験した気になって外出しなくなる。みんなもう家の中でゲームやパソコンで、新しい体験を済ましちゃってる。でも、エンジェルフォールに行ったら、1km離れていても水浸しになるんだよって言ったら、周りの人は、驚きますよね。そういうのって、実際に行ってみなきゃわからないよね。だから本当に、自分の肌で感じるような旅をしないと、自分の財産になっていかないと思うんだよね。例えば、ゲーム。対戦して物凄い得点とって、本人は喜ぶじゃない。でも、その体験っていうのは、誰とも共有できないんだよね。10年経って、「あのゲームで、俺はな、満点取ったんだ」って聞いても、「あ、そう」で終わりじゃないですか。でも、そのときに、ケニアまで行って、ケニアでゴリラのいる森

まで入っていったんだっていう体験は、10年経っても、20年経っても、周りの人も共有して喜んでくれるんですよ。

さあ、旅に出よう！

とにかく、今の人たちは旅をしなすぎだよ。僕らの若い頃の、若者調査の中で、自分が欲しいものを3つ挙げろみたいなのをやると、必ずそのベストテンの中に海外旅行とか、入ってくるわけですよ。「旅」っていう単語の入った歌もいっぱいあったのに、今はあんまり歌の中にもないんだ。旅に出かけると、ただ単に面白いだけじゃなくて、辛いこともあるかもしれないけど、自分の財産になるからね。ずっと、持っていける。旅はいくつになっても、いいんだよ。僕なんか、今だに若い気であるから未知の旅ばかりしている。逆にいうと、若い人たちと遊んでいるから若くいられるのかもな。もう、そろそろ大人しくしていようかなという気分になっても、「隊長、次はどこ



鍋とともに漕ぐツーリングシーン ©RYO HONDA 2013

に行くんですか？」なんて言われちゃうからさ、「次はお前たちがびっくりするようなところ！」って思わずいってしまう。そういう歳の離れた若い人と遊ぶっていうことと、自分が行ったことのない初めての旅をするっていうことが、物凄くおもしろい人間をつくるんだな。最近の若い人たちがよく、めぐり会いがないというけど、旅にはめぐり会ってのもたくさんあるんだよ。だから、思い切って旅に出かけてみることさ。



本田 亮 PROFILE

1953年東京生まれ。日本大学芸術学部卒業。元電通エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター。環境マンガ家、エッセイスト。同時にサラリーマン転覆隊隊長として世界の川をカヌーで旅し、その体験談をアウトドア雑誌で連載する。2011年、震災を機に電通を退社。現在は、講演活動に日本中を駆け巡るかたわら、2017年1月にはパタゴニアに遠征し、サンタクルス川を200km下った。